樂之堂漫筆（第一）

中村正雄
宇都宮市外峰

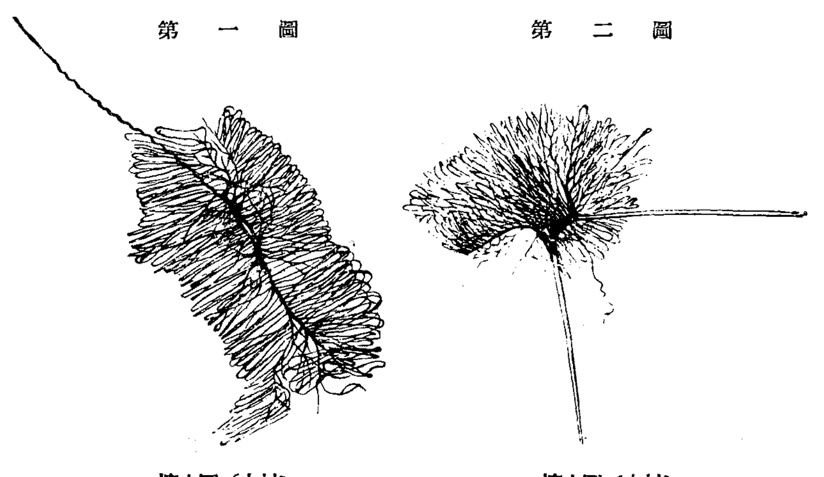
1. 追憶

老生が蜘蛛に遠ざかつて，彼是れ十幾年かになる。いつの間にか斯學も大發展して，專門の學會も成立し，機關雜誌迄發行せらるゝを見ては，唯夢かと許り驚かさるゝのである。此間にありて岸田氏が，大御所と申しては御氣に障るかも知れぬが，嚴然として光つて居らるゝは慶賀に堪へない。老生なども蜘蛛につきて何か語らんとするには，先づ同氏に敬意を拂はねばならぬ。つまり蜘蛛に手を着け始めし因緣は，何年の昔になるか，同氏が京都府に在住せられし折りに，日本蜘蛛類に關する印刷物を頂きしのが，抑もの動機であつた事を思出さるゝからである。(それは紀念として保存してある筈であるけれど，一寸搜し出されぬので題目を書き兼ぬるは遺憾である）一時は佳なり熱中したので，地方新聞は忽ち蜘蛛博士の稱號を授けて呉れた。所が學校の學生迄が是を應用するので，一時憂欝を覺へた事など思出さるゝ。蓋し我邦にては蜘蛛の意味は兎角惡るい方に解釋さるゝからである。（西洋では勤勉とか勇敢の意味を持たせるを聞いて居るも）其後數年にて，上京の機を利用し，同氏を瀧野川の寓に訪問せし事ありしが，既學に對する其の所藏文献の豐富なるに驚かされた。其の造詣の深きは勿論であるが，其節蜘蛛學は是れ岸田氏に委せ置くべきものであつて，吾々素人の手を引くべきものであるとの感を強くした。つまり威壓されたとでも云ふべきであらう。故に余を蜘蛛に親しましめしは岸田氏にして，又遠ざからしめしも岸田氏と云へようか，(冗言多罪）併し近時雜誌の刊行に刺戟せられ，再び興味を喚起し來りしは，又間接同氏に感謝すべき何ものかある

のである。次に採集綺談なども思出さるゝが，今回は之を省く。本誌近刊第二號に於て，星野氏の新潟縣蜘蛛目錄を拜見しては，後繼者其人を得たるを喜びそして其の大成を希望して止まない。

2. 害蟲驅除として蜘蛛を活用する方案なきか

害蟲の驅除法として，寄生蜂或は他の天敵を利用するのが原則であるとすれば，此の蜘蛛の活用を見逃してはならないと思はるゝが，從來此方面の調査研究を聞いた事がない。普通吾人は門燈或は照明の及ぶ硝子窓等に於て，オウヒメクモ，タナクモ或はハイトリクモ時としてはオニクモまでが營々として，餌をあさつて居る事を見る。そして場所によりては佳なり色々の蟲類の屍體をも見るのである。殺蟲劑をも要せぬ極めて自然的な誘蛾燈の働きをして居ると云ふべきであらう。故に是を一歩進めて，彼の有名な螟蛾或は夜蛾の如き，八釜しく問題視さるゝ害蟲に活用すべきではなからうか。水田には能くコマチクモナカムラオニクモ，ヲナガアシナガクモ等を見るけれども未だ其巣に螟蛾の引掛つて居るのを見た事はない，それだから是には蜘蛛の習性其の蛛絲の性能或



第一圖　擴大圖（中村）

第二圖　擴大圖（中村）

は捕食力とか，又は蜘蛛と害蟲の兩者の發育時期の適合等を調査して其種類を極めねばならぬ事となるから，そして其放養工作もあるし，仕事は中々容易でない。老生は唯そうした時期の來らんことを希望して置く。山林等にては能くヂョロウクモ，コガネクモ，クサクモ等の大きな巣によりて，相互に害蟲の驅除をやつて居る様に見受けらるゝが，是等潜伏場所越年等に惠まるゝ山林地帶と異り，水田及畑作地に於ては，蜘蛛の棲息安住所として，極めて不利な點も考に入れねばならぬのである。害蟲處理問題の八釜しき今日，單に提案として筆を擱く。（追記）以上書き終りて，本誌新刊號に，尾崎氏の稻の害蟲を驅除する蜘蛛の項を讀みて，欣快を覺へた。

3. 蛛絲の附着點

去る七月シヤレーの中にて，ナカムラオニクモ（*Araneus cornutus* Clerck.）を飼育せしに，やがて巣を張り其中に産卵するを見た。能く注意すると，シヤレーの硝子蓋の裏面に於て，約0.5乃至0.7粍許りの白き黴状のものを散見するのである。更に擴大鏡にて注視すると，それは蛛絲の附着點であるのである。勿論總ての蛛絲は皆同様の附着點より出て居るのではないが，丁度植物の毛根とか根毛とか云つた様に見えるのである。更に是を顯微鏡下に檢鏡せしものは，上記の第一圖である。唯毛根等と異なる點は，其先端が皆環狀と云ふも不適當なる言葉であるが，丁度織物の耳の糸の往復した様に，重複して居る事である。其後サツマノミダマシ（*Araneus scylloides* Boesenberg et Strand.）を同様シヤレー中に飼育せしに，是亦産卵してあつたが，矢張り前者と似た顯象を見たのである。第二圖は卽ちそれである。素より多數のものゝ中幾分づゝ其形に相違あるは勿論の事で，單に代表的なものを一個描寫したに過ぎない。唯兩者とも同型式であるとは云ひ得る。猶ゴミクモ（*Cyclosa octotuberculata* Karsch.）アシナガクモ（*Tetragnatha praedonia* L. Koch.）コクサクモ（*Agelena opulenta* L. Koch.）等をも飼育して見しに，是等は何れも其産卵を見るを得ざりしも，其の多くの蛛絲中，極めて少數で且つ小形ではあるが，所々に矢張り同型

式のものを檢鏡するを得るのである。種類によりて多少づゝ特形質を見出さるゝは，或は分類上の資料になるかも知れない。何れにしても其先端の環狀様をなして居る事は同一である。それが粘液線とか縦線とかに限定せらるゝとも思へぬし，又其の蛛絲を附着せしむる動作等は，全く實見し兼ねたが，普通體後部を幾分振る様にして，絲を附着せしむる様な動作を見る事はあるが，どうしてこう云ふ複雑な型になるか更に觀察を要する。

(附記)

ナカムラオニクモの卵嚢は，外部に薄き外廓狀の袋を作り，或は箱とでも云つた方が適當かも知れぬ。(但しこれは徑二寸餘のシャレーの内であつたから角形に見へたが，自然狀態にては袋狀であるかも知れぬ）そして其の一隅に紡錘形の内廓狀の袋を張り，更に其内に多少紡錘形の卵嚢に，多數の卵を封せしものであつた。七月十八日に產卵を認めしが，廿五日には其の孵化するを認めた。又サツマノミダマシの方は，少しく緊ぐ絲を錯交したる中點に，硝子蓋に接して別に嚢なし，一は卅粒許り一は廿粒許り外に五六粒許りのもの，合せて三塊を離れ離れ產付けてあつたが，遂に其の孵化を見なかつた。不受精のものであつたかも知れない。時は八月十日であつた。

4.　蠅取クモの蠅取り

余の住宅の一硝子戸に蟠居する一蠅取クモ *Menemerus confusus* Bosenberg et Strand.)は，家蠅 (*Musca domestica*) 姫家蠅 (*Faunia carnicularis*) 等の寄り來るものを捕らずに，自體よりも遙に大なる肉蠅 (*Sarcophaga carnaria*) を抑さへて居るのを見る。又其殘骸をも落して置くのである。一日(八月六日)午後三時半に，其の兩者をシャレーに入れて，其の動作を觀察せしに，クモは其の前體卽ち頭胸部を左右上下して，敵の動靜を伺ふが如く，或は策戰計畫を練るが如く，又は跳躍狀の姿勢を取りなどしたが，五分の後約三糎位の距離より飛び付くと見しも，敵はさるもの翅ばたき一振にして，是を振ひ去るより，奇襲中々効を奏せず，三・四回亂鬪肉彈戰を演じて，漸く敵の後脚の先端を捕

へたりしも，得意の毒刺も施すに術なく，惜しくも敵を逸せしかば，其の退却の虚に乗ぜしや決然と敵の下腹部側面に噛みつくを見た。時に三時五十二分。かくて蠅は脆くも麻醉狀態となりて敗れた。間もなく蜘蛛は右肩部に噛み直ほせるを見た。夜九時に見た時は同じ姿態であつたが，翌朝には頭部は切り離されて殘骸は殘されてあつた。蜘蛛の餌になつたものは頭部の取れて居るものが多い様に思ふ。以前何かの本にて，蠅取クモは蛛絲を以て自體を支へて，蠅を襲ふ様に書かれたものを讀んだ覺あるが，是は狹きシヤレー内ではあつたが，そうした事は認められなかつた。但しシヤレー內には後に能く見れば，糸を引きし跡は僅かに認められたが，其意味は全く不明のものであつた。以上極めて非學術的な記述ながら，時節柄彼の勇敢物語を綴つたに過ぎぬ。(以下次回)

(昭和十二年十月十八日記)

海峽殖民地 Singapore に在る Raffles Museum より出版の Bulletin No .13 (August, 1937) を覽ると Dr. E. A M. Speijer が A Collection of Pedipalps fromt he Raffles Museum (pp. 171-175, 2 pls.) と題する 1 篇を寄せて居ます。此の Pedipalpi といふのは飯島博士の「動物學提要」中の蛛形綱脚鬚目であり谷津博士の「動物分類表」の無角綱脚鬚目であり江崎博士の「多足類蜘蛛類」の蛛形綱脚鬚目であり，何れにしても眞正蜘蛛目と對等の地位を占める Arachnoidea 中の一動物群(目)であります。此の目は有鞭亞目 Uropygi 無鞭亞目 Amblypygi の 2 團に分れ前者はサソリモドキ(一名シリヲムシ)といふのが本邦に於ける代表者であり，後者は日本產は久しく知られなかつた處昨年外南洋パラオから其の 1 種が報告されたことは既に本誌第 1 卷第 2 號で御承知の通りであります。亦昨秋の日本動物學會第12回大會に於て鹿野氏が臺灣紅頭嶼の洞窟より *Charon* sp を獲たことを報ぜられたので Amblypygi は臺灣にも居つた譯であります。今原著者は Uropygi を 2 屬 4 種 Amblypygi を 3 屬 3 種報じて居ますが *Charon* 屬は *Charon grayi* (Gervais) 丈で馬來半島から報ぜられるのは之が 2 度目とありますから同地ではさう普通のものでは無い様です。